

アオとの約束

奄美市立節田小学校 四年 榊 さかき ココ

「わあ。きれい。」

夕日がオレンジ色に光るころ、わたしはおじさんと近所をさんぽしながらこの島について教えてもらうことになった。集落を歩いていると、細い道があった。この道は何やら向こうがわにつながっているように見える。おじさんは、

「神道だよ。」

と教えてくれた。

「神道。」

わたしは聞き返した。

「神様が通る道。」

おじさんはそう言った。

「へえ。」

わたしは身近にそんな道があるなんて思ってもいなかった。

「もう暗くなるから帰ろうか。」

おじさんとわかれたころには、もう夜が始まりそうだった。

わたしはその夜ゆめを見た。一ぴきのウミガメが青く光った何かを差し出している。それは、太陽の光を受けてピカピカとかがやくシーグラスだった。わたしのにぎりこぶしくらい大きい。ウミガメは他にも何か言っていたが聞き取れなかった。

「朝だよ。起きて。」

お母さんの声で目がさめた。わたしの手にはもうシーグラスはない。何だか気になって海に行ってみた。

「わあ。今日もきれいだな。」

波打ちぎわから海をながめていると、一ぴきのウミガメが近づいてきた。よく見ると体中がゴミだらけだ。

「あれ。もしかして、ゆめに出てきた子。」

ウミガメは頭をたてにちよこんと動かした。

「名前は、何。」

「アオ。」

「え。話せるの。」

おどろくわたしのことなどかまいもせずアオは話しつづける。

「ねえ助けて。仲間がゴミを食べたり、ゴミが体にからまったりしていて動けないの。」

「え。」

わたしは少しおどろいたが、

「どうしたら良い。」

とたずねた。

「ついて来て。」

わたしはアオの後ろから海の中を泳いでいった。沖の方に進むと明かりが次々と見えてきた。

「わあ。まぶしい。」

あつという間にウミガメたちがいる広場について。そこで見た光景はしょうげきなものであった。ウミガメの体はゴミだらけ。あちこちにゴミがうかんでいて、魚やさんごしようも弱っていた。

「わたしたち人間は、こんなことも知らずにすごしていたなんて。」

わたしはいてもたってもいられず、すぐにそうじに取りかかった。ペットボトルやビニールぶくろ、あみなど様々なものが海の中にあった。広場だけで、たくさんのごみが集まった。

「すべて人間が作り出したゴミばかり。」

わたしはなみだが止まらなかつた。アオに送られて、わたしは元いた海岸にもどってきた。

「きれいな海を守るね。」

わたしはアオと約束をした。

その夜、わたしはおじさんにこの出来事について話した。おじさんは、

「なるべくたくさんの人を集めて、ビーチクリーンをし

よう。」

といった。

「そうか。みんなで力を合わせればもっとたくさんのごみを拾えるし、もっとたくさんの人にかんきょう問題について伝えられるよね。」

最初は少ない人数から始まったビーチクリーンだったが、回を重ねるごとに少しずつ人がふえていき、今ではたくさんの人がさんかしてくれている。

ビーチクリーンが終わった後、わたしはもう一度アオに会いたくて、何となくあの神道に行ってみた。すると、神道の向こうがわで何かが青く光っている。それは、ゆめで見たのと同じシーグラスだった。

「きつとアオからのだ。」

わたしは、アオに会えた気がしてうれしかった。

「アオ、海のかんきょう問題のこと、知らせてくれてありがとう。」

今日もウミガメたちは人間が取りもどしてくれた海で楽しくくらしています。

もちろん、その中にはアオもいます。